

17 Voice

アフリカと共に

カメラマン

久野武志



初めてのアフリカ。あまりに暑いので、ナイル川で地元の人と一緒に水浴びをした(1997年、スーダン)

アフリカに関わり出してから、18年の月日が流れた。

高校の授業で使った世界地図を持ち、アフリカに向かったのは大学生の時。まずは船で中国に渡り、ヒッチハイクや自転車やとどろり着いたアフリカは、ただただ、大きかった。「アフリカの水を飲んだ者はアフリカに帰る」。誰かが言ったこの言葉は本場で、その時ナイル川の水がぶがぶ飲んでいた僕は今、1年の大半をアフリカで過ごしている。なぜアフリカだったのか。それはもう直感だった。景色や文化よりも引かれたのは人だ。「ここで仕事したい」と思った。写真のことなど何一つ知らなかったが、3万円の中古カメラを買ってきて、僕は「カメラマン」になった。アフリカの人々と向かい合い、共に生きていくための

方法は何かと考えたら、これ以外になかった。

これまで、さまざまな国でさまざまなことがあった。戦時下のリベリアのジャングルで病気になる、生きるのを諦めかけていた時、兵士がおんぶして歩いてくれた。憧れの冒険家、上温湯隆氏の軌跡を探し、マリイの砂漠をラクダでさまよったこともある。南アフリカでは3回も強盗に襲われたし、スーダンやソマリアでは投獄された。こう思い出すとひどいことばかりだが、実はすっかり忘れていた。武勇伝はくだらないし、そ

れ以上に感動したり、うれしかったことの方が多かった。

フリーランスの最大の利点であり魅力は、自分でテーマを決め、納得のいくまで仕事を続けられることだ。9年前、ケニアに移り住んですぐに、ハンセン病の人々の撮影に取り組ん



前線で負傷した兵士が運び込まれ、民間軍事会社の兵士が必死に緊急治療を施す(2012年、ソマリア、Kyodo News)

だ。「受け入れてもらえるだろうか?」「撮影できるだろうか?」。そんな不安を抱えていたが、それは現場ですぐに飛んだ。一般の人々からさげすまれ、疎外される彼らは、外国人の僕にとつともなく優しくなった。「あんたはうちの子もだよ。いつまでもいていいんだよ」。ある老夫婦はそう言うのと、食べ物分けてくれた。他の人々も、患部を隠すこともせず、ありのままの生活を見せてくれた。生活費を稼ぐために街で物乞いをすると、自宅を出産するシーンも撮らせてくれた。人を撮影するとは、人の生活を知ること、すなわち

共に住むことだと知った僕は、結局半年近くも集落に住み込んだ。コンゴで反政府軍の撮影をした時も、南アフリカで不法移民の撮影をした時も、撮影する時はいつも、現地の人々と同じ場所で、同じものを食べ、同じところに眠る。人の心という、目に見えないものをどうやったら伝えることができるのか。いつもそんなことを考えながら、シャッターを切っている。

卵売りのあんちゃん、「シンジ・カガワ!」と笑いながらこちらを指差す若者、「Have peace」と拍手してくれる人もいる。ただそれだけなのに、彼らの言動はいつも僕の心の琴線にタッチする。

僕のコインには、いつもたくさん入っている。ナイロビの街で出会った物乞いの人々に渡すためだ。物乞いへの施しは、「彼らの自立心を奪い、結果的にダメにする」という考えもあると思うが、僕はこれまでアフリカに育てられ、多くの人々に助けられてきた。だからせめて、何かお返しをしたいのだ。コインはそのささやかな形の一つだと考えている。

日本人の多くは、アフリカを一つの国として捉えているように思う。54もある国の違いなんて、遠く離れたところにいる日本人は分からないのも当然かもしれない。しかしそこには、確かに違いがある。その独自性は、僕にとって何よりも魅力だ。僕はアフリカが大好きだ。頭にくることもあるし、ひどい目に遭うこともある。でもここで出会った皆さんの優しさを心の糧とし、最高の写真という形で、多くの人に伝えていきたい。



人、景色、文化など、全てが美しいエチオピアは、お気に入りの国の一つだ(2012年)



治安は悪いが、住めば都だった大好きな街、ナイロビ(2013年)



朝食の前にいつも深い祈りを捧げるハンセン病の男性。共に暮らす中で、彼は僕を自分の子ども同然に扱ってくれた(2007年、ケニア)

<Profile>
くの・たけし
1974年愛知県出身。大学時代に中東、アフリカを旅し、世界の社会問題や矛盾に関心を持つ。卒業後、テレビ編集会社を経てフリーに。「戦争と人間性」を主なテーマに、アフリカを専門に取材を続けている。2007年上野彦馬・日本写真芸術学会奨励賞、2010年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞。ケニア在住。